

会 議 録

1 会議名	第6回南砺市協働のまちづくり推進会議
2 議題	(1)南砺市協働のまちづくり推進会議提言書に対する回答について (2)第5期南砺市協働のまちづくり推進会議への引継ぎについて
3 開催日時	令和3年10月5日(火) 開会時間:午後7時/閉会時間:午後9時10分
4 開催場所	井波コミュニティプラザ「アスモ」2階 大会議室
5 会議出席者	<p>[委員:全20名] ※50音順、敬称略 出席:林委員長、江田副委員長、磯辺、上坂、齋藤、佐竹、竹部、 中山、能登、長谷川、南、山田 欠席:池田、石渡、長田、坂本、俵、名村、橋爪、松本</p> <p>[市:出席3名] 事務局 南砺で暮らしません課 船藤課長、勇崎係長、得能</p> <p>[傍聴者:なし]</p>
6 会議記録	<p>委員長あいさつ</p> <p>本日は我々の2年間の任期中の最後の会議である。富山県は昨日からステージ1になり、完全に収束はしていないが少し落ち着いてきたところである。新型コロナウイルス感染症に翻弄された中でも、委員の皆様にはたくさん議論いただいた。</p> <p>今期は条例の改正、それに伴う解説版の作成、7月26日には市長への提言など、多くのご支援とご協力を賜り御礼を申し上げたい。今月15日で任期は終わるが、今回は市長提言に対する回答があるので委員各位で確認いただき、第5期への申し送りについてご意見をいただきたいと思う。</p> <p>【事務局より資料説明】</p> <p>(1)南砺市協働のまちづくり推進会議提言書に対する回答について 事務局 資料の1ページから7ページの説明。</p> <p>A委員 4ページの右下について、3月定例会ではなく3月議会ではないか。</p> <p>事務局 定例会ではわかりにくいので、3月定例議会に修正する。</p>

B委員

南砺市民、大人世代への周知はこれからもしつこいほどに続けていただきたいと思う。教育関係についての取り組みは素晴らしいと思う。ただ、子供たちの時間は非常にタイトである。小学6年生の社会で小規模多機能自治、中学3年生でまちづくり基本条例について学ぶにあたり、具体的にどのようなイメージの授業を行うのか。

C委員

南砺市の小学6年生は教育出版という出版社が発行している「小学校社会」という教科書を使用している。その中の単元の2に「わたしたちの暮らしを支える政治」というところがある。その際に一般的な地方自治について学ぶことになっているが、その流れで「わたしたちのまちではどのような取り組みがされているだろうか」と、南砺市にスポットを当てていくということを想定している。したがって、特別に時間を設けるのではなく、一連の授業の流れの中に組み込める内容になっていると思う。

本推進会議の委員であるK先生は社会科専科で、既に指導案を作って授業を実施している。その指導案を南砺市内の小学校の先生方にお示しすれば、新しく時間を設ける必要なくやっていける。また、中学校の場合は総合的な学習の時間で各中学校がそれぞれに地域を発見しようという取り組みがある。例えば井波中学校なら「井波の時間」という取り組みがあり、それぞれの中学校で行っている。今回の取り組みは持ち込み行事でなく、教育計画の一環として位置づけていただければ、各学校も無理なく取り入れられる。

B委員

行政による自治と住民による自治の両方が大切だが、住民による自治が減ったので地域への愛着が薄れてしまった。住民が課題を見つけて解決するというのを小学生・中学生に伝えられれば、地域に愛着を持ってもらえると思う。

C委員

K先生の授業は、「私たちにできることはなにか」という授業であると聞いている。フィールドワークの中で小学生が学んでいくということなので、自分のこととして学習してもらえる内容だと思う。

B委員

最近住民による自治が減って全て行政に任せていた。これからは行政への依存からの脱却をめざさなければならない。依存症の人は幸せになれない。

D委員

出前講座について、年間30～40回、1,000名以上に聞いていただいているとのことだが、年齢構成などはいかがか。子育て世代はどうか。

事務局

各種団体や小・中学校からの依頼がある。年齢としては子ども世代と上の世代が多いので、子育て世代は少ない実情である。子育て世代には聞いていただけないことは課題だが、メニューとしては子育て世代向けのものもあるので周知したい。

A委員

社協の出前講座も人気だが、そこに協働のまちづくりのPRを入れられないか。

事務局

南砺市社協の講座には市の職員が出向くわけではないので、やるとしても協力要請という形になる。

D委員

なんと hag など、子育て世代が見るアプリに情報は入れられないか。

何か月検診など周知しなければならない情報と一緒に、小耳に挟めるよう入れられないか。

子育て仲間にまちづくり基本条例について教えてあげるといい反応が返ってくるが、相談窓口がわからないという意見があった。スライドで入れるならば、市民が意見を述べられる窓口も入れられないか。その情報も入れられれば一歩前へ進むと思う。

事務局

必要な情報をスライドに集約する必要があるので、取捨選択しながらまとめた

E委員

協働のまちづくりについて、僕の周りでは周知が少しずつ進んでいるが、窓口はどこか、という情報は行きわたってない。具体的な窓口を増やす段階ではないか。

事務局

行政関係であれば暮らしません課で、地域の困りごとならば地域づくり協議会や市民センターなど。内容によって、それぞれご案内できればと思う。

F委員

いろんな地域や団体が協働のまちづくりをしようという機運が高まっているが、行政が歩み寄ってきてほしい。協力的になってほしい。お金が欲しいとかではなく、なんと hag に入れてほしいということやポスターを張ってほしいということなどを想定している。公ではないから、行政ではないからと撥ねるのではなく柔らかく対

応してほしい。これから変わってくれると信じているが、今の状態は協働ではない。行政に依頼するハードルがすごく高い。お金儲けではなく、地域のためにやっているのに。

G委員

今の件は一緒に依頼に行ったので補足させてほしい。市役所の中の協働は、市役所の事業への参画になっている。市民の企画に行政が参画、応援するのも協働である。そのニュアンスが全く違う。市民団体の思いと行政との思いは同じはずである。行政の事業は市民団体に協力させておいて、市民団体の事業に行政が協力しないのは全くの筋違いである。ポスター1枚張らせてもらえない。暮らしません課から協働について市役所内部に周知、徹底いただきたい。

F委員

行政の事業にはすごく協力しているのに、こちらの事業には全く協力してもらえない。これは冷たいし、おかしいと思う。

B委員

それであれば、次期の推進会議において市長へ提言いただければと思う。今度は行政へも提言すればいいと思う。行政はやる気はあるが、簡単に今までのやり方を変えられない。

F委員

我々は今の時代を見ながら事業を進めている。行政はスピード感が足りない。

G委員

今のことについて補足したいが、子育てにかかわる事業者は営利目的のものが多。そのような団体と仕分けて協働するということが大切である。たとえば、我々のような非営利とベネッセのような事業者との線引きについて、「民間だから」という線しか引けていない。その線引きを行政の内部で工夫いただくということが、例えば次回への提言のテーマになると思う。

事務局

参考までにどこで線を引くべきと考えておられるか。

G委員

例えば、なんと未来支援センターを条例に基づく中間支援組織と認めたように、事前登録すれば良しとするなどを想定する。そこでハードルをつけられればと思う。

F委員

今は、なんと hag もポスターもハードルが高い。

B委員

これは知見として積み上げていくべきではないか。行政は、住民からの上がってきた活動をやるというのは経験値が無いからなかなか難しい。

公正公平という視点が大切という一般論はわかる。ただ、なんと未来支援センターや南砺幸せ未来基金などで、協働の事例の蓄積をしていければ。

E委員

将来的には企業との協働もあると思う。たとえ営利でも、目的が合致していれば行政と手を組めるようになるべきだ。そのような事業に対して行政がどのようにできるかということを考えるべき。目的はしっかり決めて、最初の基準はゆるくして始めればよいと思う。

A委員

数日前の新聞記事で朝日町の SDGs 宣言が書いてあった。朝日町は出身者を中心に、ということを入れていたが、南砺市はどうか。有名な人ばかり出てくる気がするが。

B委員

企業との協働ということも、ある時点で考えるべきだと思う。営利しか考えない企業は排除される時代である。まちづくり基本条例はどういう意味を持つのか、この条例をプラットフォームにするべきではないかと思う。南砺幸せ未来基金においては地域課題を解決したい事業者と手を組んでいるので、そのような知見を蓄積できればと思う。

F委員

そのような大きいものだけではなく小さいものも実施できるようになれば。

B委員

もちろんそれも含めて蓄積できれば、行政側の考え方も自然に変わっていくと思う。

G委員

「伝える」と「伝わる」は別である。先ほどの話で、小学校の先生が伝える仕組みを持っているから大丈夫ということだったが、果たしてそれで伝わるのかという別の話である。我々は条例を作ったのに伝わらないと言ってきたが、そろそろ伝わるということを考えていかなければならない。

今、自分の中で一番のテーマはウェルビーイング^{※1}である。形容詞のハッピーと

は異なる。ウェルビーイングというのは、まちづくり基本条例の前文まさにそのものである。現在進行形の状態である。南砺市のいろいろな変化に関わる人の幸せこそがウェルビーイングであると考えている。まちづくり基本条例の前文が進行形であり、授業ではこの条例の前文の読み合わせをして、それを子どもたちに理解してもらった上で授業をしていただければと思う。そのような理解の上で、市役所の職員の方も出前講座をやっていただければ。伝わるように、という視点でお願いしたい。

F委員

子どもたちにはそのような話をしても伝わらないので、K先生の授業のように自分たちで動いて、自分たちのこととして動く中で学んでもらえればと思う。

G委員

今までは伝える機会が少ないということを課題としていたが、次期からは伝わるようにという視点に変えていかなければならないと思う。伝わるようにするため、ワークショップなどをやって理解を進めていければ。

E委員

今のウェルビーイングという発想は非常に面白い。私は地域通貨という取り組みについていろいろ考えていたが、結局、実際のお金とのつながりがなくうまく働かないので新しい何かにはならなかった。結局はお金とつながるので効率主義、成果主義という結論になった。ただ、ウェルビーイングという発想は面白い。通貨が発達していないときは、水や空気や食べ物から幸せを得ていたが、お金で得られる幸せは虚構だったことがわかった。これをもっと考えて、議論していく必要があると思う。

B委員

最近南砺市の農村景観や自然環境のため、農業に取り組んでいる。人口減少に伴い農地が荒れると耕作放棄地や鳥獣害など様々な不具合が起きて、いずれ南砺市は立ち行かなくなる。住民が自分ごととして課題に取り組んでいくことは必須である。先程のように概念的なものではなく、実際の課題を考えて、自分ごととして課題を解決して次世代につないでいくべきだと思う。このような現実を住民に見せないと理解してもらえない。わかる人は言葉だけでわかると思うが。現実的に考えると今後はターゲットを絞って、数は少ないかもしれないが、頑張りたいという思いを持つ人と力を合わせて頑張りたいと思う。これは、現実的な課題に対して実際ががんばる人と一緒に頑張りたいという思いであり、お金は関係ないことである。

E委員

我々は、20年ほど前に「今の状況はまずい」と考え、自然農という農業を始め

た。農薬や肥料に頼らない、いわゆる一番基本的な農業である。まず、自分たちが生き延びられるのかというところから始めた。それが続いてきて、一時期ブームがあり少し広がったが、なぜそれ以上に広がらないのかということに悩んでいた。我々ももう少しその点について考えなければならない。我々ももっとそんなことを議論したい。

B委員

確かに自然農も大事であるが、今は普通に機械を使えば1人で10～20haの農地を使うことができる。しかし、自然農ではせいぜい1人で1haほどだろう。人口で考えると1人何百haもカバーしなければならないのに、自然農だけでは立ち行かないと思う。確かに自然農も大事だが、現実的に地域の農業を守るには企業型か集落営農を作り直すしかないと思う。

A委員

私も条件の悪い田んぼの草刈りをシルバーに依頼していたが、今年からは断られた。専門業者に頼むと数十万円かかってしまうとと言われて非常に困っている。

E委員

そのような経済性も含めて、どのような農業をやっていけばいいのかみんなで議論していくことが大切だと思う。

B委員

このような課題を住民が自分のこととして考えて、知恵を絞って解決していけば地域の絆が再生して、やっと住民が住民自治を理解していけると思う。これは農政課や行政に頼んでなんとかできるような問題ではない。それは基金が目指すところであり、これからも推進していきたい。

E委員

このような大きな問題にはプラットフォームが用意してあった方がいいと思う。

G委員

条例の第3章の中に市民の権利と責務が書いてある。その中に、市民は計画などの立案から評価までの各段階で積極的に参画するとある。その中で、議論をするプラットフォームというものを、次期への提言に引き継いでいければと思う。我々は市民会議という形がいいねと言っていたが。そのような部分も含めて次期に引き継いでいければ。

提言の回答については非常に良かったと思う。ただ、提言の仮説について、そろそろ変化していかなければならないのではないかと思う。提言の仮説が違っていたのではないかと思う。ここ一年でスピード感をもって変わった部分があると思う。例えば、条例の普及については伝える方法ではなく伝わる方法、小規模多機

能自治は推進ではなく定着ではないかと思う。

(2)第5期南砺市協働のまちづくり推進会議への引継ぎについて

委員長

第5期への引継ぎや運営方法について、皆様のご意見をいただきたいと思う。

B委員

協働のまちづくりは住民自治そのものだと思うので、さらに普及していき、住民の意識が変わっていけばと思う。

D委員

非常に歴史のある推進会議なので、新しい方への説明資料が充実していればと思う。まちづくり推進会議において、地域をまたいだ除雪の支援など、小規模多機能自治の垣根を超えた提言はできるか。

事務局

市に対して意見を言う場が少ないので、それは提言してもいいかもしれない。

H委員

協働から総働へというキャッチフレーズがある。これからは、除雪などの課題に対して、地域住民も事業者も地域外のボランティアも、垣根なく協力していく必要があるのではないかと思う。これからは総働のまちづくりへと進めていければいいと思う。

I委員

条例について、今後は伝わるようにという視点で周知できればと思う。その手法については議論の余地があるが、実際に地域に参画できるような仕組みを作っていたければわかりやすくなると思う。座学だけでなく実学、子どもたちも巻き込めるようにという仕組みを大切にしてほしい。

J委員

南砺市生涯学習連絡協議会の代表ということで2年間いろいろ勉強させていただいた。この条例の内容を地元の地区に当てはめれば、いい条例があるのに中々うまくいかないことが多かった。このような議論や条例と、実際にやってみることの違いも含めて、いろいろ勉強させていただいた。

G委員

第3期から第4期への引継ぎの洗い出しもしたい。おおよそ達成できたと思うが、みんなで振り返ることで第4期から第5期への引継ぎの手助けにもなると思

う。

B委員

人材リストについて、正直うまく機能しなかった。これは効果があったか。

H委員

正直あまり機能しなかったと思う。現役世代は忙しく、地域づくりは定年を迎えた人の仕事という認識があると思う。

今後は地域間の連携をもっと大切にしたい。自前主義ではなく連携を進めたい。南砺市全体の連携でなく、たとえば山野と太美山というような、点と点の連携も必要である。

B委員

我々は人材リストを非常にいいものだと考えていたが、地域づくりに関して言うとあまり効果がなかった。リアル開催のやとること発表会などで情報共有や底上げを図っていきたいと思う。

G委員

人材リストについては個人情報の関係もあり、中途半端な状態でそれぞれ人材がいる地域に配布したことがうまくいかなかった原因だったと思う。元々、人材リストのために集めたわけでない情報について承諾を得て配るということについて、人材リストそのものの発想はよかったが運用に問題があったと思う。今後は、このようなことについてひとつひとつ検証しながらやっていければと思う。

人材はその地域だけでなく、地域外での活躍も期待されるので、その点も頭に入れられたら。

F委員

南砺市では、自分の弱みを見せるのが恥ずかしい、自分さえよければ、自分の地区さえよければという発想があるので、人材リストがあっても意味がないかもしれない。最近、移住者の方が、「南砺市は、みんなでなにかをすればいいのに、それぞれでがんばってそれぞれが良ければいいという部分がある。南砺市で、みんなで頑張るのは諦めることにした。南砺市は合衆国だということにした。」と言われた。昔ながらの考えを変えていかないとと思う。そこで、例えばプラットフォームという発想があればと思う。全体でみられる場所があれば。

G委員

合衆国のままの方がいいこともあると思うので、市民会議のような形で、みんなで語り合っって良いこと悪いことを検証していければと思う。

B委員

全体を考えるのは行政の仕事だとは思いますが、そのようなことも含めて第5期は議論を重ねていければ。我々の議論は前に進んでいると思う。

C委員

I委員がおっしゃった通り、まずはやってみようの精神で進めていければ。部活動の統廃合の問題なども含めて、現実として人口減少による影響が目の前まで来ている。理想もあるが現実との兼ね合いがあるので、いろいろなことを考えながらも議論を進めていかなければいけないと思う。

今の学校の授業は、教え込むような授業は無い。先生が問いかけをして、自問をして自答をしていくという授業がほとんどである。最終的に、地域を支える人に会う機会が得られれば。

委員長

今の意見に合わせて、井口では井口っ子商店という取り組みがあり、子どもたちが自分で考えて地域の人と一緒に地域のためにできることを考えて実行してきた。今後は南砺市全体のことも考えていかなければならない。子どもたちが地域の中で学ぶことは地域にとっても良いことであり、良い流れができていると思う。

G委員

今の件に関連して、2点申し上げたい。まず1点目は、まちづくりをやっているすごい人が子どもたちと出会う機会を作ることはすごく大事だと思う。人を育てるのは教科書ではなく人との出会いである。来年度から授業をやるにあたり、小学校の先生の先生と我々がミーティングをすることはできないか。なぜなら、社会の先生は条例の原文しか見ていないわけなので、我々推進会議の人たちと一回話し合いをして思いを伝える機会があると、先生から子どもたちへの伝え方も変わってくると思う。

2点目として、推進会議は条例の運用に関する話を話し合う会議なので、たとえばまちづくり基本条例がない地域との比較ということはできないか。例えば、もし条例がなかったらどうなっていたのか。条例があったから何が実現されたのか、いったん暮らしません課で整理されてはどうか。そのために推進会議でそのような話し合いができればと思う。

事務局

条例の運用が的確に行われているかどうかを検証する時間はあまりなかった。その時々で小規模多機能自治や中間支援組織の検証は行っていただいているが、条例の運用状況について時間を取ってみてもらうのが本来のお仕事なので、その点は次期に進めていただければと思う。例えば公募委員への応募を増やす方法などを、さらに話し合い、掘り下げる時間があればと思う。

	<p>委員長 引継ぎ事項についてはたくさんご意見をいただいたが、事務局でまとめていただいて第5期の方に判断いただければと思う。</p> <p>G委員 第5期について、充て職の人が会議に顔を出さなくなる傾向にあるので、事務局で決め方についてご配慮いただければと思う。ただ、公募の人が多すぎると偏った人たちが増えるのではないかという意見もあると思うが。</p> <p>事務局 その点については以前の推進会議でも意見をいただいていたので、第5期については各団体代表ではなく、各団体より協働のまちづくりについて興味のある方を推薦いただく形で依頼したので、ご指摘の問題は起きにくいと思う。</p>
8 閉会	副委員長があいさつし、会議終了

※1 ウェルビーイング…定訳なし。幸福。満足した生活を送れている状態、幸福な状態、充実した状態など多面的な幸せを意味する。